

令和元年度・令和2年度 強度行動障がい 地域連携モデル 事業報告

<豊中市モデル>

目次

1. 強度行動障がい地域連携モデルとは 3
2. 強度行動障がい地域連携モデル事業の展開 4
3. 令和元年度豊中市モデルの実施内容 5
4. 豊中市の基礎情報 7
5. 第1回会議まとめ（自分や地域の強み、できること） 10
6. ワークショップについて 14
7. ワークショップ①（アセスメントから支援立案まで） 15
8. ワークショップ②（地域課題の協議） 19
9. 令和元年度のポイントを踏まえた令和2年度の展開 22
10. 令和元年度及び令和2年度の活動の総括 27
11. 令和3年度までの取組み状況 29

1.強度行動障がい地域連携モデル事業とは

事業の目的	<p>強度行動障がい者の生活を地域で連携して支えるため、当該地域の特性を把握して地域課題にアプローチし、必要な支援体制を検討・整備することで、地域での支援体制モデルの作成をすすめる。</p> <p>各事業所における支援力の向上とともに地域における関係機関の連携による支援体制の拡充を図り、地域での支援体制確立を目指す。</p>
実施内容	<p>○地域支援体制検討会議とワークショップを実施。</p> <ul style="list-style-type: none">・ 検討会議で強度行動障がいに関する地域課題の抽出及び支援策を検討。・ 強度行動障がい者を地域で支えるために必要な仕組みづくりのため、検討会議の結論をもとに必要なワークショップ（支援者スキルアップや地域で普及啓発をはかるもの等）を開催。 <p>○事務局 市町村障害福祉担当課など、府立砂川厚生福祉センター、府地域生活支援課</p>

2.強度行動障がい地域連携モデル事業の展開

	2018年度 (平成30年度)	2019年度 (令和元年度)	2020年度 (令和2年度)	2021年度 (令和3年度)
泉佐野市・田尻町モデル (2018年度～)	<ul style="list-style-type: none"> ・検討会議開催 ・ワークショップ開催 ・中間報告書作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・協議会等で検討会を継続 ・効果測定と改善策の検討 ・最終報告書の作成 <p>泉佐野市・田尻町地域モデル</p>	<p>一般化モデル(案)の作成</p>	<p>一般化モデルの作成</p>
豊中市モデル (2019年度～)	<p>泉佐野市・田尻町での取組みをベースに異なる地域・規模の市町村で実施</p> <ul style="list-style-type: none"> ・検討会議開催 ・ワークショップ開催 ・中間報告書作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・協議会等で検討会を継続 ・効果測定と改善策の検討 ・最終報告書の作成 <p>豊中市地域モデル</p>		

3.令和元年度豊中市モデルの実施内容

◆豊中市での実施目的

- ・豊中市では、在宅で生活している強度行動障がい者が多く、不安定な状態や家族の高齢化等により地域で支援困難となっているケースの支援の組立てについて着目する。
- ・施設や病院からの地域移行を目指す上での課題にも着目し、地域課題や市域を超えた共通の課題を抽出し、効果的な支援体制整備について検討する。

◆実施項目

①支援検討会議の開催（年3回）

- ・第一回（令和元年8月21日）：市の実態、困難事例（4事例）から見える地域課題について検討。
- ・第二回（令和元年11月27日）：課題に対する仕組みづくり（ワークショップ）について検討。
- ・第三回 まとめと今後の検討の場について検討。→**開催中止・事務局打合せ（令和2年2月18日）実施**

②ワークショップ（令和2年2月10日）の開催

- ・豊中市の事例をもとに、強度行動障がいのアセスメントから具体的支援を立案する講義及び地域課題を協議する演習を実施。また、市内の障がい者支援施設「みずほおおぞら」の見学を実施。
（市、基幹センター、関係事業所等11名参加）

◆ 検討会議の構成

(1) 事務局

豊中市福祉部障害福祉課

豊中市障害者基幹相談支援センター

大阪府立砂川厚生福祉センター

大阪府障がい者自立相談支援センター

大阪府福祉部障がい福祉室地域生活支援課

(2) 検討会議メンバー

<司会> 東大阪大学子ども学部子ども学科 准教授 (当時) 潮谷 光人

<助言者> NPO法人サポートグループほわほわの会 かざみどり相談室 宮崎 充弘

<豊中市関係機関>

豊中市障害者自立支援協議会

ピープルウォーク (自閉症・発達障害等支援の会)

大阪府民生委員・児童委員協議会連合会

相談支援事業所みらい

相談支援センターぱすてる

ゆうゆうトライ (居宅介護・同行援護・重度訪問介護・行動援護)

生活介護事業所みのり (生活介護)

障がい者支援施設みずほおおぞら (施設入所支援)

4.豊中市の基礎情報（第1回会議にて情報共有）

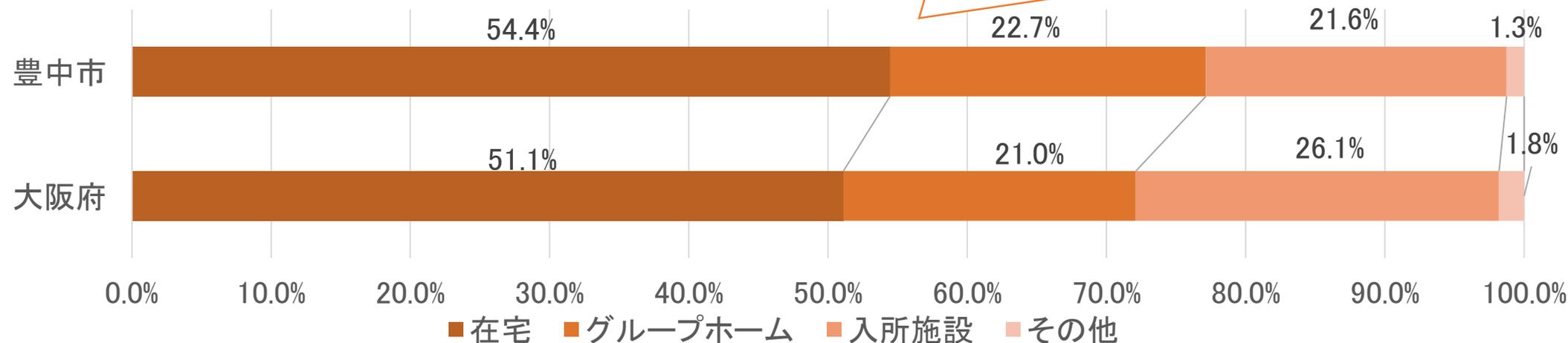
（1）強度行動障がい者数

	人口	障がい支援区分認定数	うち強度行動障がい者数	人口割
豊中市	398,479	2,840	630	0.16%
大阪府 (政令市含む)	8,837,812	56,740	7,546	0.085%
大阪府 (政令市除く)	5,298,176	30,543	4,647	0.088%

※豊中市データは平成31年4月1日時点
 ※大阪府データは平成28年10月1日時点

（2）強度行動障がい者の生活の場割合

豊中市では在宅・グループホームの割合が高い



(3) 支援困難事例について (概要)

第1回検討会で検討した4事例から、その特性や状況等を以下のように集約整理した。

診断	自閉症、知的障がい
障がい特性	音に過敏に反応する (聴覚過敏) 特定の物事に強く固執する 要求を表現することが苦手 環境の変化が苦手 など
行動障がい	大声、自傷、他傷、破壊行為、噛みつき など
状況	<ul style="list-style-type: none">・複数の事業所を利用し在宅生活している・ドライブを毎日継続している・強い噛みつきがあり、在宅生活が困難・登校渋りがある・パニック時の行動障がいがあり、支援困難 など

事例から
「自分や地域の強み、できること」
を協議

助言者からのコメント

○事例を通じて考えられる課題について

- ・ご家族の感覚的なしんどさや困りごとがそこに表出されている。その前には本人自身がしんどかったはず。児童期から本人のしんどさをキャッチする仕組みづくりが大切。
- ・在宅生活では家族がなんとかやっているところもある。その大変さの部分を本人のみならず家族を含めてどう支援したらいいのか見極めることも必要。それは相談支援の役割になる。生活ということを考えると20歳を超えて、家族とだけの暮らしではなく、距離をとって過ごすことも必要。「一緒に暮らす」のではなく、「地域で暮らす」という視点。ヘルパーやショートステイに行動軽減を求めるのではなく、行動障がいがあっても、過ごせる環境を作っていくことが必要。

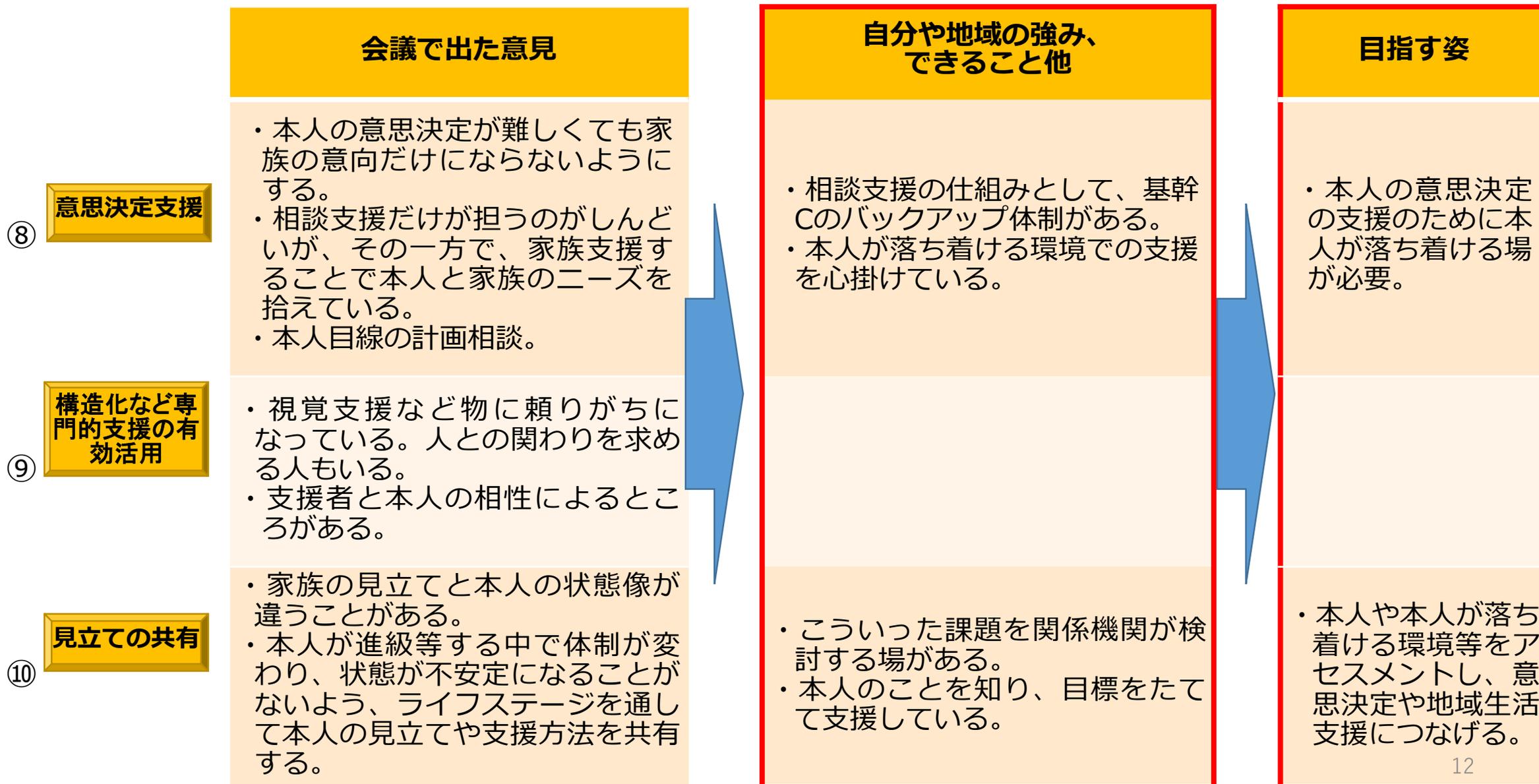
5.第1回会議まとめ (自分や地域の強み、できること)

	会議で出た意見	自分や地域の強み、 できること他	目指す姿
① 児童期からの 支援	<ul style="list-style-type: none"> 本人が感じているしんどさを早期からキャッチする仕組みを整備することで強度行動障がいの予防につながる。 	<ul style="list-style-type: none"> 令和元年度「児童発達支援センター」を開設。 就学前の支援体制が手厚い。 民生委員が送迎ボランティアをしている。 	
② ライフステージを通しての 支援	<ul style="list-style-type: none"> 家族への助言、支援がうまくいったと家族が納得できるようなフォローアップの関わり。 ライフステージを通して関わる役割を誰が担うのか。 	<ul style="list-style-type: none"> 就学前から就学期への支援のつながりが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> ライフステージにおける流れをトータルでみる。
③ 家族支援	<ul style="list-style-type: none"> 家族の思いを受け止める場が必要。 児童期からの、レスパイト目的の施設利用や迅速なサービスの決定・調整。 本人だけでなく介護者である家族を含めてどう支援するか見極める役が必要。相談支援の役割ではないか。 		
④ 家族への知識の普及啓発	<ul style="list-style-type: none"> 障がいについて知識を普及し、支援者と家族・本人の目標がずれることのないような取り組みが必要。 	<ul style="list-style-type: none"> 様々な機会を通じて啓発活動を行っている。 	

5.第1回会議まとめ (自分や地域の強み、できること)

	会議で出た意見	自分や地域の強み、 できること他	目指す姿
⑤ 連携した見 守り支援シ ステムの 構築	<ul style="list-style-type: none"> 受入れ先事業所だけでなく、本人・家族を中心に関係機関や人が多数で支えていく地域連携の仕組みの検討。 	<ul style="list-style-type: none"> 包括ケアシステム推進総合会議がある。 相談支援は計画、委託、基幹Cの三層構造の仕組みがあるが、連携について事業所の意識により動きは異なる。 相談支援事業所連絡会があり、ネットワークができています。 受入れ事業所の支援スキルがある。 	<ul style="list-style-type: none"> バックアップ体制を仕組みとしてつくる必要がある。
⑥ 検討の場	<ul style="list-style-type: none"> 仕組みを検討する場については、招集は誰がやるのか、明確にしておかないと機能しにくい。 	<ul style="list-style-type: none"> 地域生活支援の仕組みを検討する場として、自立支援協議会がある。 	
⑦ 地域での生 活の形を 考える	<ul style="list-style-type: none"> 家族と一緒に暮らすだけでなく、地域で暮らすという視点をもつ。 本人は、行動障がいがあってもその状態で過ごせる場所（環境）をもつ。 		<ul style="list-style-type: none"> 障がいの理解を深める場が必要。

5.第1回会議まとめ (自分や地域の強み、できること)



5.第1回会議まとめ（自分や地域の強み、できることの再整理）

令和元年度第1回会議での強みに関する意見及び第1回検討会で十分な検討が難しかった項目を踏まえて、第2回会議においてまとめ、仕組みづくりの検討を行うとともに、ワークショップの実施について検討。

豊中市の強み、課題を再度整理したところ、以下のような強みが挙げられた。

<強み>

- ・ 自立支援協議会、基幹相談支援センター等が確立しており、検討できる場、地域のネットワークを構築できる土壌がある。

<課題>

- ・ 一方で、意見が出なかった等の項目について、検討する必要がある。
支援方法の理解が十分に周知されていない。
家族を支える仕組みづくりが必要。

以上から、今回のワークショップのテーマとして

- ・ アセスメントや支援立案の流れを学習する。（講義）
- ・ 地域課題を支援者で改めて話し合う。（演習）

ことに決定した。

6.ワークショップについて

「①アセスメントから支援立案」、
「②地域課題の協議」
についての手法を実践

●目的	アセスメントや地域課題の協議をツールを用いて実践し、今後の活用につなげる。また、市内の障がい者支援施設を見学し連携につなげる。
●対象者	市、基幹相談支援センター、市内の主たる事業者等
●実施日時	令和2年2月10日（月）午後2時から午後5時まで
●参加者数	11名
●内容	<ul style="list-style-type: none">・強度行動障がいの状態を示す方のアセスメントから具体的支援の立案へ豊中市事例について～冰山モデルと4つのプロセスの作成・豊中市事例から見える地域課題について（ワールドカフェ方式でグループワークを実施）・障がい者支援施設みずほおおぞらの見学

7.ワークショップ①<アセスメントから支援の立案まで>

アセスメントから支援の立案

- ・ 自閉症の障がい特性について理解する。
- ・ アセスメントする。 アセスメントシート（参考）等を活用して情報を整理。



- ・ **冰山モデルで支援を考える。**（参考：冰山モデルシート）を活用して、行動の背景を整理し、支援プランを立案する。

▣見えてきたこと

- ・ 多角的な視点で本人の特性を考え支援方法を考える必要がある。
- ・ 組織全体で共通意識をもって取り組む必要がある。



- ◆ 専門性を高める研修の受講
- ◆ 支援者間、支援機関間の連携
- ◆ 第三者によるコンサルテーションの活用 などの促進

(参考) アセスメントシート①

アセスメントシート

氏名 _____ (_____ 歳)

療育手帳		障がい支援区分		重度加算	あり ・ なし
診断名					
<行動障がい得点>					
<行動特徴>					
<課題となっている行動 1～3つ程度>					

<ADL>

食事	自立・一部支援（見守り、声かけ等）・全支援
排泄	自立・一部支援（見守り、声かけ等）・全支援 ※ 生理時の様子（女性）
入浴	自立・一部支援（見守り、声かけ等）・全支援
睡眠	

<障がい特性リスト> ※該当しないものは削除する

予め、一般的に考えられる障がい特性をリストアップしておき、各利用者に該当する特性を、担当者が選択する。（該当しないものを削除する）削除する際は、消した項目も覚えておき、下記の「強みのリスト」の作成に活かす。

◆コミュニケーションについて

<理解面>

ことばを聞いて理解する事が苦手

- ・非言語指示（絵カード・写真・文字・実物・ジェスチャー・指さし）を理解する事が苦手
- ・情報が多いことによって混乱する
- ・抽象的な概念の理解が苦手

その他

<表出面>

自発的なコミュニケーションに困難さがある

ことばでの表出が苦手

- ・要求を表現する事が苦手
- ・援助を求める事が苦手
- ・拒否を示す事が苦手
- ・一方的なコミュニケーション
- ・非言語での表出（絵や写真カード・文字・クレーン・指さし・ジェスチャー・首振り・）が困難
- ・エコリアでの表出がある

その他

◆社会性・対人関係

・相手の気持ち、人間関係を理解する事が苦手

・アイコンタクト、共同注視など他者と気持ちを共有する事が苦手

他者の行動に興味を（持つ・持たない）

- ・集団での活動に参加（できる・苦手）
- ・人や場面によって態度を変える事が苦手

その他

◆特定の物事への興味関心

・特定の物事に強く固執する（具体的に： _____)

・特定の人に固執する

・常同、反復的な行動に没頭する

その他

該当するものを囲む



該当するものを囲む



該当するものを囲む



(参考) アセスメントシート②

◆ 転導性・衝動性・注意注目

- ・ 興味関心が激しく移り変わる
- ・ 見た刺激に影響を受けて、突き動かされる
- ・ 落ち着きがなく、その場でとどまっていられない
- ・ 場面、活動の切り替えが苦手
- ・ 結果をかえりみず衝動的に反応してしまう
- ・ 必要なものに注目できない
- ・ 注目しすぎてしまう

その他

◆ 時間の整理統合

- ・ 活動（予定）の見通しを持つことが苦手
- ・ いつ終わるのかを理解する事が苦手
- ・ 時間、活動の変更への対応が苦手
- ・ 待つことが苦手

その他

◆ 空間の整理統合

- ・ 場所を多目的に使う事が苦手
- ・ 物や材料を整理しながら活動を進める事が苦手
- ・ 自分と他者の空間の境界をイメージする事が苦手

その他

◆ 変化・変更への対応

- ・ 場所、人、予定、活動などの変化へ不安・抵抗を示す
- ・ イレギュラーな状況に対する不安・抵抗を示す
- ・ 予定や状況の変更が苦手
- ・ 経験していないことを想像することが苦手
- ・ ルーティンに固執する

その他

◆ 記憶の維持

- ・ 現在自分がやっている行動の記憶の困難さ（何をしているか・どこに行くか忘れる）
- ・ 指示が長いと全部覚えられない
- ・ 一度覚えたこと（経験した事）の記憶が消えない。忘れない。

その他

◆ 感覚の特異性

- ・ 特定の感覚刺激に敏感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・痛覚・味覚）
- ・ 特定の感覚刺激に鈍感（視覚・聴覚・嗅覚・触覚・痛覚・味覚）

その他

◆ 微細運動・粗大運動の困難さ

- ・ 手先を使った活動が苦手、不器用さ
- ・ 体全体を使った行動が苦手
- ・ 道具を使った行動が苦手

その他

<強み・好きなものリスト> ~障がい特性リストで消した項目は、裏を返せば得意~

- ◆ 本人が持っているスキル（プットイン・マッチング・上から下の理解・時計、タイマーの意味・色、形の理解など）
- ◆ 終わりを何で知る事ができるか（フィニッシュボックスにいれる・指示・タイマー・材料がなくなったらなど）
- ◆ 本人の好きなこと・得意なこと（場所・もの・遊び・活動など具体的に）

<社会生活>

- ◆ 日中活動
- ◆ 余暇時間の過ごし方
- ◆ 外出（危険回避・公共交通機関の利用）
- ◆ 医療機関の利用

(参考) 氷山モデルシート

シートの活用例…本人の障がい特性と、環境要因のミスマッチが行動障がいを生む。

アセスメント情報を元に、本人の障がい特性に合った支援方法を整理する。

注：以下は、シート活用方法の説明であり、実際の事例とは異なる。また、実際の支援にあたっては障がい特性と環境要因について、行動観察、アセスメントシート等から十分に吟味する。

食事でお茶を要求し、食堂内のやかんにあるお茶がなくなるまで頭突きをするなど自傷を続けてしまう。

本人の障害特性

- ・ことばを聞いて理解することが苦手。
- ・特定の物事に強く固執する。
- ・いつ終わるのか理解することが苦手。



相互に作用

環境・状況の影響 (環境要因)

- ・(健康面への配慮から) 約束事「お茶は3杯まで」を口頭で伝えている。
- ・目の前にお茶が入ったやかんがある。

【支援方法】

- ・お茶カードを3枚用意する。
- ・目の前に小さなペットボトルを3本用意する。
- ・カードとペットボトルを交換する。なくなったら終わり。

7.ワークショップ② <地域課題の協議>

地域課題の協議

地域課題解決シート「支援概要」を使い、それぞれの事例にかかるすべての課題等を列挙(個人ワーク)

●解決した課題(個人ワークで出た意見)

・取り組んだこと ・強み ・できたこと ・可能性 など

本人の周囲に支援者がいる。／短期入所やレスパイトのための受入れ先がある。／柔軟な支給決定ができています。／サービス利用により家族との距離がある程度とれている。／複数の事業所を組み合わせサポートができています。／サービス利用や家族による外出ができ本人のニーズに沿った対応ができています。／医療が介入し、連携ができています。

●残った課題(個人ワークで出た意見)

・あらたな課題 ・課題 ・ニーズ など

本人の希望がつかみ切れしていない。本人中心の支援の方向性が定まっていない。／家族支援が必要。(高齢化により家族の負担の増大、家族による服薬調整)／支援者の負担が大きい。(マンツーマン対応の見直し)／社会資源の不足。／本人に適したコミュニケーション支援の充実。／早期に医療につなげる。／短期入所の利用が不確実。

それぞれが感じている課題をグループワークで改めて議論

■認定された地域課題 (グループワークで議論した上で、認定)

- ◆本人に対して…先を見据えた支援が必要。意思決定支援をするキーパーソンが必要。コミュニケーション支援の充実。支援者の負担増の解消。
- ◆家族に対して…高齢化や家族の負担増などに対して、家族支援が必要。
- ◆支援の連携 …医療との連携が必要。支援者の負担増の解消。

解決するための
方法案を
整理!

在宅の事例をもとに、「地域課題協議シート」「アクションプランシート」を使い課題を整理。

(参考) 地域課題解決シート

地域課題協議シート

協議参加者の所属と氏名； _____

令和 _____ 年 _____ 月 _____ 日

①事例概要	②支援概要	③解決した課題と残った課題	④認定された地域課題
テーマ() 障がい種別(知的) 年齢(歳)		★解決した課題	
		★残った課題	⑤解決するための方法案

8. 令和元年度のポイントを踏まえた令和2年度の展開

地域の長所

- ・ 基幹相談支援センターや相談支援事業所の役割分担ができている
- ・ 市と基幹相談支援センターの連携体制がある
- ・ 行動援護の利用量などケースに応じた柔軟な支給決定をしている
- ・ 拠点となる入所施設がある

1. 令和元年度の取り組みから見えてきたこと（現状では不十分であり、今後必要なこと）

- 地域の支援者の声の吸い上げ
- 在宅者が多く、家族への支援が必要
- 本人のコミュニケーション支援と意思決定支援の充実
- 構造化など専門的支援をする職員へのスーパーバイズ等のサポート

2. 検討課題

- 特定の支援者に偏らない仕組みづくり
- 家族支援について（レスパイト等、家族負担の軽減）
- 本人を見立て、本人主体の支援を組み立てるキーパーソンの育成

3. 今後（令和2年度）の取り組み

- 地域の好取組事例を研修会等で共有
- モデル事業から抽出された課題に関し、カテゴライズ、優先順位付け
- 協議・議論の場の設置

R2年度の地域の状況（変化など）

- ・令和2年度、新型コロナウイルス感染症の影響により、事業所連絡会等が中止されたが、徐々に事業所間でのオンライン会議等が開催され、緊急時の連絡等について、調整が進んだ。

令和2年度の取組みと成果

<取組み>

- ・豊中市障害者自立支援協議会地域課題検討部会を開始。
- ・支援者等への研修は中止となった。

<成果>

部会での検討テーマに強度行動障がい児者に対する支援が盛り込まれ、地域生活支援拠点を中心として、地域での課題整理、体制整備を検討していく方向となっている。家族、地域の支援者からニーズを確認した上で、地域全体の課題を整理している。また、支援者育成のための研修会については引き続き検討していく必要がある。

- 豊中市障害者自立支援協議会地域課題検討部会について
 - ・地域生活支援拠点等整備【豊中モデル】案※の作成と提案を目標として令和2年度から令和4年度にかけて実施予定。
 - ・以下のステップで、まず、家族、支援者の聞き取り、市域への量的調査等を行い現状を把握し、課題を整理した上で、地域生活支援拠点の機能強化を行っていく方向となっている。

I 現状を知る

II 取組テーマを絞り込む

III 地域生活支援拠点等整備【豊中モデル】案を作成・提案

IV 豊中市地域生活支援拠点等整備を具体化する

- 支援者等への周知研修について

- ・事業所連絡会の中止等に伴い、研修会は実施できなかった。

※豊中市障害者自立支援協議会内に、令和2年度より設置。基幹相談支援センター等にて構成されている。

自分や地域の強み、できることの充実

(令和元年度会議で出た意見に加えて、令和2年度までの取組みにて、加えて確認した意見(下線部)を追記)

	会議で出た意見	自分や地域の強み、 できること他	目指す姿
① 児童期からの支援	<ul style="list-style-type: none">本人が感じているしんどさを早期からキャッチする仕組みを整備することで強度行動障がいの予防につながる。	<ul style="list-style-type: none">令和元年度「児童発達支援センター」を開設。就学前の支援体制が手厚い。民生委員が送迎ボランティアをしている。	<ul style="list-style-type: none"><u>・早期にしんどさをキャッチし、支援につなげる。</u>
② ライフステージを通しての支援	<ul style="list-style-type: none">家族への助言、支援がうまくいったと家族が納得できるようなフォローアップの関わり。ライフステージを通して関わる役割を誰が担うのか。	<ul style="list-style-type: none">就学前から就学期への支援のつながりが必要。	<ul style="list-style-type: none">ライフステージにおける流れをトータルでみる。
③ 家族支援	<ul style="list-style-type: none">家族の思いを受け止める場が必要。児童期からの、レスパイト目的の施設利用や迅速なサービスの決定・調整。本人だけでなく介護者である家族を含めてどう支援するか見極める役が必要。相談支援の役割ではないか。	<ul style="list-style-type: none"><u>・基幹相談支援センターや相談支援事業所の役割分担ができており、相談体制が構造化されている。</u><u>・計画相談のモニタリング等のタイミングで家族の声を吸い上げられる。</u><u>・市と基幹相談支援センターの連携体制がある。</u>	<ul style="list-style-type: none"><u>・相談支援ネットワークとの連携して、家族の声をスムーズに相談につなげる。</u>
④ 家族への知識の普及啓発	<ul style="list-style-type: none">障がいについて知識を普及し、支援者と家族・本人の目標がずれることのないような取組みが必要。	<ul style="list-style-type: none">様々な機会を通じて啓発活動を行っている。	<ul style="list-style-type: none"><u>・家族、支援者の理解を広げる。</u>

自分や地域の強み、できることの充実

(令和元年度会議で出た意見に加えて、令和2年度までの取組みにて、加えて確認した意見(下線部)を追記)

	会議で出た意見	自分や地域の強み、 できること他	目指す姿
⑤ 連携した見 守り支援 システムの 構築	<ul style="list-style-type: none">・ 受入れ先事業所だけでなく、本人・家族を中心に関係機関や人が多数で支えていく地域連携の仕組みの検討。	<ul style="list-style-type: none">・ 包括ケアシステム推進総合会議がある。・ 相談支援は計画、委託、基幹Cの三層構造の仕組みがあるが、連携について事業所の意識により動きは異なる。・ 相談支援事業所連絡会があり、ネットワークができています。・ 受入れ事業所の支援スキルがある。	<ul style="list-style-type: none">・ バックアップ体制を仕組みとしてつくる必要がある。
⑥ 検討の場	<ul style="list-style-type: none">・ 仕組みを検討する場については、招集は誰がやるのか、明確にしておかないと機能しにくい。	<ul style="list-style-type: none">・ <u>地域生活支援の仕組みを検討する場として、自立支援協議会がある。</u>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>地域生活支援拠点</u>が協議の場のキーパーソンとなる。
⑦ 地域での生活の形を考 える	<ul style="list-style-type: none">・ 家族と一緒に暮らすだけでなく、地域で暮らすという視点をもつ。・ 本人は、行動障がいがあってもその状態で過ごせる場所(環境)をもつ。	<ul style="list-style-type: none">・ <u>地域生活支援拠点の相談機能を活用して、啓発を検討。</u>	<ul style="list-style-type: none">・ 障がいの理解を深める場が必要。

自分や地域の強み、できることの充実

(令和元年度会議で出た意見に加えて、令和2年度までの取組みにて、加えて確認した意見(下線部)を追記)

	会議で出た意見	自分や地域の強み、 できること他	目指す姿
⑧ 意思決定支援	<ul style="list-style-type: none">・ 本人の意思決定が難しくても家族の意向だけにならないようにする。・ 相談支援だけが担うのがしんどいが、その一方で、家族支援することで本人と家族のニーズを拾えている。・ 本人目線の計画相談。	<ul style="list-style-type: none">・ 相談支援の仕組みとして、基幹Cのバックアップ体制がある。・ 本人が落ち着ける環境での支援を心掛けている。	<ul style="list-style-type: none">・ 本人の意思決定の支援のために本人が落ち着ける場が必要。
⑨ 構造化など専門的支援の有効活用	<ul style="list-style-type: none">・ 視覚支援など物に頼りがちになっている。人との関わりを求める人もいる。・ 支援者と本人の相性によるところがある。	<ul style="list-style-type: none">・ <u>事業所連絡会等、啓発できる場がある。</u>	<ul style="list-style-type: none">・ <u>継続的な研修等で普及活動を行う。</u>
⑩ 見立ての共有	<ul style="list-style-type: none">・ 家族の見立てと本人の状態像が違うことがある。・ 本人が進級等する中で体制が変わり、状態が不安定になることがないよう、ライフステージを通して本人の見立てや支援方法を共有する。	<ul style="list-style-type: none">・ こういった課題を関係機関が検討する場がある。・ 本人のことを知り、目標をたてて支援している。	<ul style="list-style-type: none">・ 本人や本人が落ち着ける環境などをアセスメントし意思決定や地域生活支援につなげる。

9. 令和元年度及び令和2年度の活動の総括

1. 有効だった取組み

○モデル事業において整理した課題を踏まえながら、市独自で地域課題検討部会を設置し、支援体制の検討を開始できた。強みを生かし、課題を検討した結果、既存の資源を見直して、体制整備へとつなげることができた。

2. 現状では不十分であり、今後必要な取組み

○幅広い家族のバックアップの仕組みづくり

○本人主体の支援を組み立てるキーパーソン、幅広い支援者の育成

○医療機関との連携の整理

→具体的な体制づくりを進めていくことが必要

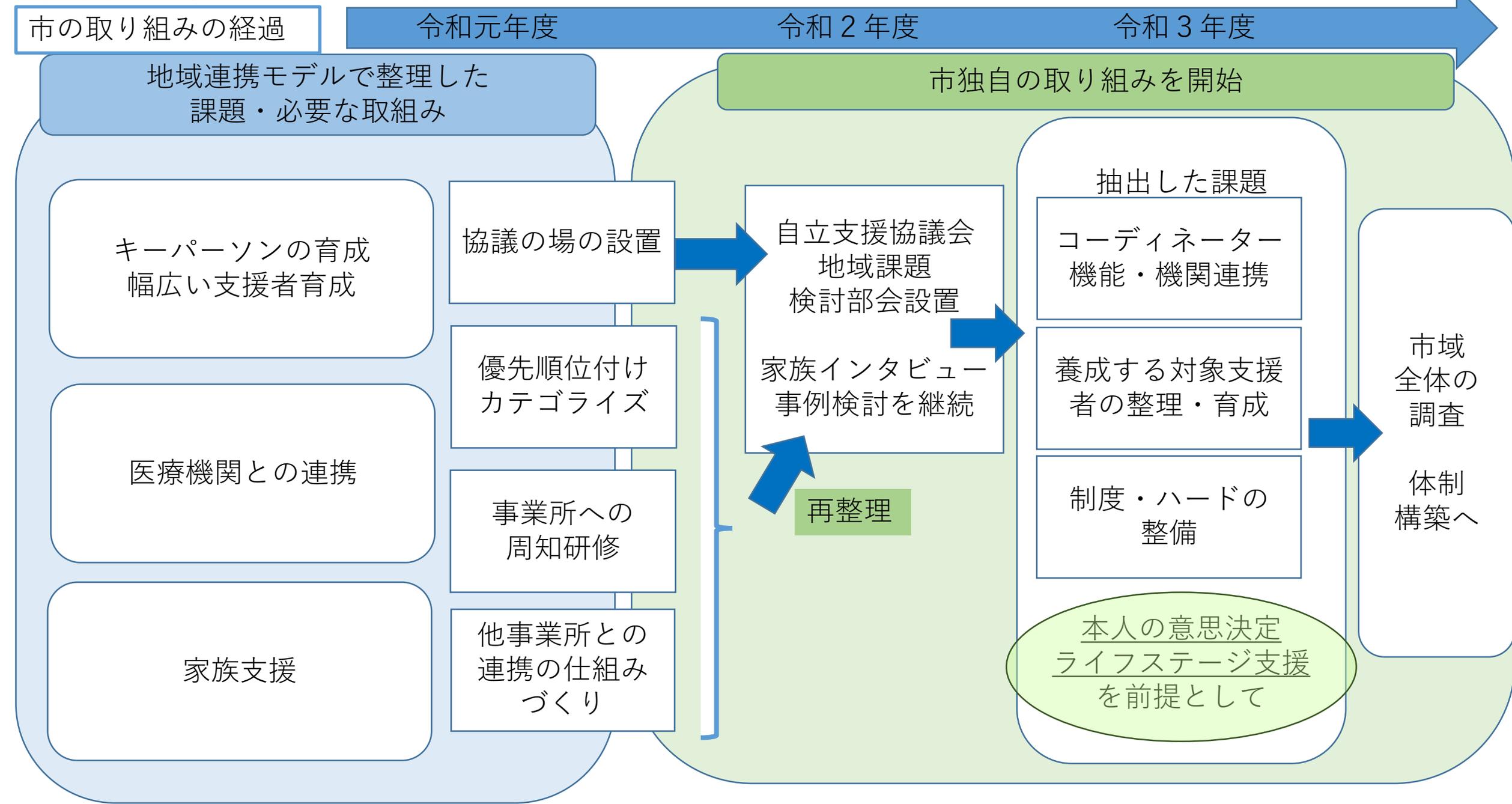
3. 今後の展開

○地域生活支援拠点を中心に支援体制の整備・機能強化を行い、家族のレスパイトが必要なケース等に適切なサポートが届く仕組みづくりを行う。

○強度行動障がいの状態を示す方への支援者、キーパーソン育成のため、研修実施体制を整える。

○地域生活支援拠点のみならず、他の短期入所事業所等と連携できるような体制整備を検討する。

10. 令和3年度までの取り組み状況



11. 令和3年度までの取組状況

令和2年度総括（抜粋）

地域生活支援拠点を中心に体制整備・機能強化

- 1－家族のレスパイトが必要なケース等に適切なサポートが届く仕組みづくり。
- 2－強度行動障がいの状態を示す方への支援者、キーパーソン育成のため、研修実施体制整備。
- 3－他の短期入所事業所等と連携できるような体制整備を検討。

地域生活支援拠点を、
強度行動障がい地域連携の中心に

○R3年度 地域課題検討部会にて、地域生活支援拠点が中心となって担う機能について、検討を継続。

○個別事例の聞き取りを踏まえて、緊急期、安定期、自立期に整理して、必要なサポート等を検討。

○コーディネーター機能、支援者教育、制度・ハード面等の整理。

- 1－医療との連携において、家族のレスパイト等、連携が進んだ取組みを参考として分析。
- 2－支援者養成について、幅広い事業所での利用者の受け入れが進むことを目標に、研修を実施する対象事業所、研修内容を絞り込み。
- 3－1事業所から複数事業所へと進んだ取組みについて分析。

→地域生活支援拠点が中心となってコーディネーター機能を担うこと、必要な資源等の開発の方向性等について、進展してきている。引き続き、上記をテーマに、市内に調査対象を広げて、必要性を精査。具体的な方策について、整理していく方向で展開している。